

市政ニュース

大草原の文化交流

第9回モンゴル友好訪問使節団を派遣

ボクト郡(モンゴル国)が本市の友好都市であることから、本市とモンゴル国は、1年交代で訪問団派遣と受け入れを行っています。

今年は訪問の年に当たり、8月3日から10日までの8日間、中学生を中心とした訪問団10人(団長・真野副市長)がモンゴル国を訪れました。

モンゴルでは現地の同世代の子どもたちとの交流を中心に、首都ウランバートルでのホームステイや、野生復帰に取り組



▲第54学校を訪問し、みんなで記念撮影



▲大草原で馬に乗り、気分は遊牧民

む世界最後の野生馬タヒの視察、伝統的な天幕住居ゲルでの自然体験などを行いました。

訪問した第54学校は、昨年、研修生として本市に来訪したヤダムスレンさんの学校で、朝青龍の出身校でもあります。ここで、子どもたちは、豊岡市や通う中学校を紹介し、モンゴルの生徒と意見交換も行いました。

子どもたちは、モンゴルの青空や果てしなく広がる大草原の中でさまざまな体験をして、生き生きとしていました。今回の経験で国際感覚が培われ、「小さな世界都市 豊岡」を担う人材育成につながることが期待しています。

まち全体の活性化のために 中心市街地にぎわいを 豊岡市中心市街地活性化基本計画策定委員会を設置

豊岡駅通りを中心とした市街地は、人口減少と高齢化の進展、商店街の機能低下により、少しずつにぎわいが失われてきており、市街地空洞化が進行しています。

また、市街地の健康増進施設や駅前広場整備、新庁舎建設事業をどのように結び付け、今後のまちづくりを進めるかということも重要な課題です。そこで、まちの個性や歴史、

伝統を生かしながら、市民の皆さんが暮らしやすい「歩いて暮らせるまち」を目指し、中心市街地活性化計画の策定に取り組みます。

7月12日、中心市街地を構成する事業者や地権者、市民企業や団体の代表者などで組織する「豊岡市中心市街地活性化基本計画策定委員会」を設置しました。なお、策定委員会は原則、公開しています。

未来を担う子どもの防災教育 夏休み子ども防災監養成講座開設

7月27日、8月6・10日の3回、小学5・6年生を対象に「夏休み子ども防災監養成講座」を開設しました。

この講座は、地域防災計画の合言葉、「みんなの力で命と暮らしを守る」の実践の一端で、公助に依存しない、自助・共助による減災思想を普及啓発するために行うものです。参加した子どもたちは、台風23号水害を振り返りながら、図上訓練「DIG」や災害を小



▲図上訓練「DIG」を体験

主な市政の動き

7月

12日 第1回豊岡市中心市街地活性化基本計画策定委員会開催
16日 第1回いのちへの共感に満ちたまちづくり条例案検討委員会開催

19日 防災行政無線「防災ワンポイント」スタート
20日 豊岡市事務事業評価委員会(22、26日、8月2日)開催

23日 東京直行便実現促進大会開催
24日 但馬空港フェスティバル10(25日)

26日 第1回職員防災研修会
27日 モンゴル訪問団結団式(訪問8月3日~10日)

夏休み子ども防災監養成講座開設(8月6・10日)
28日 「生物多様性セミナー基礎編」開催

8月

1日 世界ジオパーク委員現地(山陰海岸ジオパーク)視察(5日)
9日 世界一田めになる学校in東京大学(東京都)

真夏の空の祭典 3万2千人を魅了

コウノトリ但馬空港フェスティバル¹⁰を開催

7月24日・25日の2日間、但馬の夏を代表するイベント「コウノトリ但馬空港フェスティバル」が開催され、全国から訪れた航空ファンなど、3万2千人の来場者でにぎわいました。

フェスティバルのメインのスカイイベントでは、レッドブル・エアレースでアジア人唯一のパイロットとして活躍中の室屋義秀さんが、華麗で豪快な世界最高峰の曲技飛行を披露。

他にも各種航空機材によるデモフライトなどが行われ、25日には陸上自衛隊の対戦車&観測ヘリも来航しました。

また、熱気球係留フライトやハンググライダー・シミュレーター、セスナ機遊覧飛行などの大空体験イベントは、早朝から長い行列ができるほど大人気でした。

地上でも、ステージイベント、紙飛行機工作教室、但馬グルメまつり、スカイ団体や

観光・イベントブースなど盛りだくさんで、家族連れなどが夏休み最初の週末を楽しく過ごしました。



▲見事な曲技飛行に観衆はくぎ付け

「山陰海岸ジオパーク」、世界ジオパーク認定に向けて 世界ジオパークネットワーク委員が現地視察に来訪

世界ジオパークネットワーク（GN）委員のニコラス・ゾウロス（ギリシャ）さんとパトリック・マッキーバー（イギリス）さんが山陰海岸ジオパークの現地視察のために来訪されました。

8月1日の鳥取市を皮切りに、3日には本市エリアを視察されました。本市では、城崎温泉に宿泊。神鍋高原、コウノトリ文化館、玄武洞公園

を回りながら、地質遺産の保護状況やGN加盟にふさわしい活動ができているかなどをチェックしました。委員は、「地形・地質は要素でしかなく、そこに適応した生きものがいて、人が暮らし、文化を築く、それを説明することがジオパークだ」と話しました。

山陰海岸ジオパークの世界ジオパークへの認定可否は、10月に開催予定の会議で決定



▲玄武洞公園の視察の光景（左側2人がGN委員）

中貝市長の徒然日記 ③

それでも、それでも

今度は、増井光子さんを失った。英国での不慮の事故だった。毎週東京からコウノトリの郷公園に通っておられた。「でも、ここは日本人で」6月下旬、東京で開かれたコウノトリの郷公園・元研究部長の池田 啓さんを偲ぶ会でお会いしたときも、同園長の増井さんは、いつもどおり元氣満々だった。亡くなったなんて。いきなりそんなこと言われたって。

最初の出会いは、ぼくが県会議員になった1991年の夏だった。多摩動物公園に園長の増井さんを訪ねた。最初の議会質問でコウノトリの野生復帰を当局に訴えるつもりだった。その意義について確信があった。しかし、専門家の意見を聞いておきたかった。無意味なことなのか、不可能なことなのか。

「中貝さん、それはとても価値のある仕事です。できます」増井さんは言下にそう言われた。ぼくは自信を持った。一緒にばかりごとしました。

「願えばかなう」という増井さんの信念が、未知の事業に明るさと勇気を与えた。

計報を聞いて柳生 博さんが電話をかけてこられた。「おけ、中貝君、つらくてもくじけるなよ」

増井さんの言葉を元に、ぼくはいつもこう思っている。「願うこと、願いつづけること、投げ出さないこと」

